



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3512 号 2017.2.12 発行

全国初、認知症改善に介護ロボ導入

河北新報 2017年2月12日



テレノイドと記念撮影に臨む(左から)村井知事、佐々木施設長、石黒教授

認知症の改善効果が期待される遠隔操作型アンドロイド「テレノイド」を名取市の特別養護老人ホーム「うらやす」が全国で初めて導入し、記念式典が11日、現地であった。赤ん坊ほどの大きさのテレノイドが施設の高齢者や職員にお披露目された。

人材不足が深刻な介護分野でのロボット介護機器の導入を目指す県が、開発企業と施設を仲介した事例の第1号。テレノイドは1体100万円で、オペレーターが遠隔操作して利用者と対話する。表情や体つきがシンプルなため高齢者が孫や子どもといった親しい人を投影しやすく、情緒安定効果があると言われる。

式典でテレノイド開発者の大阪大基礎工学研究科の石黒浩教授が「日本の介護現場は物理的なサービスで精いっぱい、対話のサービスまで手が回らない。ロボットが施設の質向上につながる」と述べた。

3体の導入を予定する、うらやすの佐々木恵子施設長は「テレノイドを抱いたお年寄りには心躍るように生き生きとしている。そこから職員が学ぶことはたくさんある」とあいさつ。村井嘉浩知事は「宮城から新しい介護のモデルを全国に発信したい」と語った。

介護ロボ特需、現場とズレ 補助金先行、持ち腐れも

日本経済新聞 2017年2月12日



イノフィスのマッスルスーツは、背中に装着する本体に内蔵された人工筋肉が力仕事を軽減する

介護施設がロボット特需に沸いている。国が多額の補助金を出した効果だ。ただ現場の声を聞くと介護ロボットに違和感を感じるスタッフも多く、普及には課題が残る。

「国の補助金を得た受注が昨年後半に1000台あった」。装着型の介護ロボット「マッスルスーツ」を製造販売するイノフィス(東京都新宿区)最高執行責任者(COO)横幕才さんは話す。人工筋肉を内蔵し、介護スタッフが高齢

者をベッドから起こしたり入浴介助したりするときの腰の負担が減らせる。

2013年の会社設立後、特需前までの累計の販売台数は約1300台。今は急増した注文への対応に追われる。

人手不足が深刻な介護現場の負担を減らすため、国は13年度から介護ロボットの開発支援を始めた。さらに普及のため15年度の補正予算に52億円を計上した。ロボットというと装着型の機器を思い描くが、手押し車のような移動支援、リフトのような移乗機器、見守りセンサーなど対象は幅広い。これらを介護施設などが購入する際、約90万円を上限に全額を補助する。今年度末までに約5500カ所の施設がこの制度を利用する。

■手のぬくもりに拘泥

民間シンクタンクの試算では15年度の介護ロボットの国内の市場規模は11億円弱。その約5倍の補助金を国が投じるのだから特需に沸くのも当然だ。ただメーカー側は手放して喜んでもらえない。イノフィスの横幕さんは「正しく機能を理解し使ってもらわないと、『役に立たない』と悪評が立ち、逆に今後の普及の妨げになる」と懸念する。

介護現場ではロボットに否定的な声が強いためだ。12年に厚生労働省がまとめた報告書では、介護施設の12%が「人の手によるぬくもりあるサービスを理念としており、介護ロボット導入は反対」と答えた。また、「導入したいが、現場で利用できるような有用な介護ロボットがない」との回答も14%あった。

神奈川県を受託を受けて10年度から介護ロボットの普及支援を続ける、かながわ福祉サービス振興会（横浜市）理事長の瀬戸恒彦さんは「今も現場の意識はあまり変わらない。ベテランほど自分のやり方、思いがあり機械の介入に否定的。トップダウンで導入しても、現場スタッフが使いたがらない」と説明する。

■使い勝手悪く

一方で、メーカー側も現場のニーズを吸い上げ切れていない。全国で有料老人ホームを運営するオリックス・リビング（東京・港）は、ほとんどの介護ロボットを試し、移乗リフトと見守りセンサーを導入した。営業推進課長の入江徹さんは「技術は素晴らしいが、介護の実態に即していない機器がある」と指摘する。

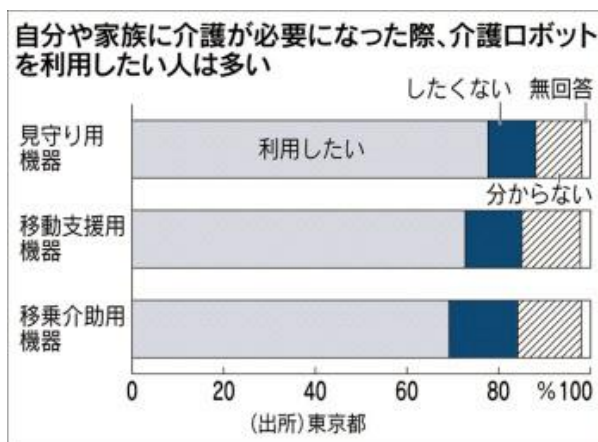
装着型ロボットは脱着に時間がかかり、高齢者が「トイレに行きたい」と言ってから着ていては間に合わない。しかも「人の手で持ち上げられるのは痛いから嫌だ」という高齢者が実は多かった。「介護者の負担の軽減はリフトで十分。先端技術に飛びつく前に使い勝手を見極めないと宝の持ち腐れになってしまう」

こうしたメーカーと介護現場のミスマッチを解消する取り組みも始まっている。イノフィスは福島県内の特別養護老人ホームにマッスルスーツを提供し、使い勝手を試してもらっている。現場の生の声を製品開発につなげる。

高齢者住宅経営者連絡協議会が開いた「ロボット介護機器」展示会に多くの施設関係者が訪れた（東京都千代田区）

高齢化する日本は35年に介護スタッフが68万人不足するとの推計もある。東京都が15年度に20～60代を対象にした調査で、7割の人は見守りや移動支援のロボットを利用したいと答えた。介護施設の入居者の中には「機械より、知らない人に触れられる方が抵抗感がある」という人もいた。介護する側が思うほど介護される側は「人の手のぬくもり」にこだわっていない。

高齢者に寄り添う介護ロボットを開発・定着させていくには、メーカーと介護現場が連



携し、双方の意識のズレを解消していく必要がある。

■業界団体、導入を後押し

有料老人ホームなどの運営会社などが組織する高齢者住宅経営者連絡協議会は2月3日に都内で「ロボット介護機器」展示会を開いた。研究から実用化段階に入り、購入可能な介護ロボットは急速に増えている。ただ製品を実際に見て試せる機会は限られるため、協議会がメーカーに声を掛け、今回初めて展示会を企画した。先端技術を知ることによって人手不足に悩む介護現場への導入を後押しする狙いだ。介護施設の現場スタッフなど約280人が来場した。



参加メーカーは11社。移乗介助や移動支援、排せつ介助、見守り、コミュニケーション支援など幅広い分野の介護ロボット14製品が並んだ。例えば「RT2」は両手を添えて使用する歩行アシスト機器。起伏や歩行速度に合わせて駆動力が増減する。上り坂では力強く引っ張ってくれ、下り坂ではスピードが上がりすぎないようにブレーキが利く。

「RT2」は足腰の衰えを補助し、高齢者の歩行を助ける「ネオスケア」は就寝中の高齢者を見守るシステム。設置したカメラとセンサーが高齢者の状況を画

像処理して24時間監視。身体を起こしたり、ベッドから下りようとしたり、床下にずり落ちたりしそうになったらケアスタッフが携帯する情報端末のアラームを鳴らし、画像情報を送る。夜間でも常時見回る必要がなくなるので介護スタッフの負担を減らす効果がある。来場した施設関係者は「うちの施設はまだ何も導入していないが、いずれ検討しなければいけない。想像以上に技術が進んでいて感心した」と話す。

協議会は2014年に内部委員会を立ち上げて、ロボット介護機器を評価してきた。森川悦明会長（オリックス・リビング社長）は「介護分野の人手不足は深刻で、必要な労働力を年々採用できなくなってきている。介護ロボットの技術は一定のレベルにきている。いろいろな製品を実際に試してみて、導入のきっかけづくりにしてほしい」と展示会の企画意図を説明する。



高齢者住宅経営者連絡協議会の森川悦明会長

日本の高齢化はこれからが本番。団塊世代が75歳以上となる2025年以降、どうやって介護ニーズに対応するのか。従来通りの人手に頼った人海戦術では成り立たないと森川会長はみる。「今も『介護は人がやるもの』』といった意識が残り、介護ロボットの導入に業界全体が積極的とは言いがたい。人の手こそが真心だと考える介護スタッフも多いが、実際に高齢者の声を聞いてみると、そう

とも言いきれない。例えば移乗介助。人手による移乗は無理な姿勢を強いられたり、体と体の密着点に加重が集中し痛かったりする。布で包み込み移乗できるリフト形式の介護ロボットの方が『楽でいい』と話す高齢者が実は多い。介護ロボットは、ただ単に人手不足を補う手段ではなく、より良い介護を実現する道具にもなりうる」

普及の課題は現場の意識だけではないという。「日常記録の作成がいまだに自筆で行われるなど介護現場はIT（情報技術）化さえ遅れている。極端な言い方かもしれないが、介護現場の仕事内容や仕方は10～20年前とほとんど変わっていないし、このままだと変わりそうもない。変化の乏しい職場に若い人たちが魅力を持てるとは思えない。介護ロボットの導入で今後介護現場に大きな変革が起こるかもしれない。将来の夢をいだけるような職場環境につくり替えていかないと、若者は介護職をますます敬遠するようになり、人手不足がさらに深刻になる」と森川会長は主張する。

■ネットをのぞくと「機械と人間、すみ分け必要」

ツイッターでは「肉体的な労働が解決される」「力仕事の補助だけでも介護には役立つと思う」など日本の技術力の高さを評価する声があった。ただネット上でも賛否は割れている。否定的な意見は介護現場の当事者らしき人が多いようで「現場じゃ評判悪くて全然普及していない。税金もつたいないね」「高いロボット買うぐらいなら給料を上げろ」と手厳しい。

「代替できる作業はロボットに任せ、人らしい温かさを要求する部分を人間がやる。すみ分けが必要」と冷静な分析もあった。先端技術で何ができるかを優先する前に何を任せたいかを考えることも重要のようだ。調査はホットリンクの協力を得た。(編集委員 石塚由紀夫)

昭和の障害者の思い克明に 30～40年前の有線放送番組を本に



東京新聞 2017年2月12日
昭和の障害者らの声を本にした日佐戸輝さん。手前は番組を録音したテープ
野田市に以前あった有線放送で、1974(昭和49)年から10年間、障害のある人や親たちが日々感じた喜怒哀楽を率直に語る番組が流れていた。番組の録音テープをもとに編集した本「昭和を生きた! 野田の障害者」が今冬、自費出版された。約30～40年前の当事者の肉声から、当時の障害者らの思いと社会状況が浮かび上がる。現在との比較もできる貴重な証言集だ。(飯田克志)

番組の司会役だった市身体障害者福祉会の元会長、日佐戸(ひさと)輝さん(93)が二〇一五年十月から、保管していたテープをボランティア団体の協力で書き起こし本にまとめた。

番組のタイトルは「社会福祉の時間」。当時の「野田市有線放送」が七四年十月から八三年十二月まで、ほぼ月一回のペースで計百十回放送した。一回二十分で朝と昼に流した。

旧陸軍兵士だった日佐戸さんは終戦直前の四五年七月、仙台市で空襲に遭い、右足を負傷して失った。

有線放送から番組の依頼を受けた時は福祉会事務局長。「戦前戦中は障害者はやっかいもの扱い。これからは一人の市民、人間として生きていくために私たちも頑張ろう」と、仲間と熱心に活動していた時だった。

「番組は障害者の生の声を聞き、理解してもらう絶好の機会」と、知人たちに協力を依頼。出演を渋る仲間には「番組に出ることで社会が変わる」と説得したこともあった。

番組は日佐戸さんとの対談形式。延べ百五十人以上が番組で語った。放送期間中の七六年には、国連が八一年を国際障害者年に決めるなど、世界的に障害への意識が変わり始めた時期でもあった。

証言集では「私は車いすに乗ってます」「白杖(はくじょう)が頼りです」「施設がほしい」「戦争はいやです」など九つのテーマに分け、三十四回分を掲載。出演者は自分の障害や生き立ち、外出時や仕事の苦勞と楽しみ、障害への周囲の理解などを素直に語っている。

放送当時と比べ、障害者への支援制度は整えられ、道や駅など街のバリアフリーは進んだ。一方で、昨年七月には相模原市の障害者施設で殺傷事件が起きた。日佐戸さんは「本は、苦しい思いの中にいた障害者が立ち上がった記録。心のバリアフリーに時間はかかると思うが、読んでもらい、共生の社会の実現に少しでも役立ってくれれば」と話している。

三百部発行。県内の図書館などに寄贈。A5判。二百七十二ページ。問い合わせは日佐戸さん＝電04(7122)1418＝へ。

【障害者らの声】

下半身が不自由で車いすを使う男性「(外出時の障害の) 1番がトイレでもって、次に段差。段差のない病院が近くにほしい」

下半身が不自由な別の男性「まだまだ車いすで大勢の中に行くと変な目で見られたり、必要以上に哀れみを掛けてくれる人がいますが、車いすに乗ってれば足が動かなくても大抵のことはできるし、健康な人と同じように接してほしい」

目が不自由な男性「(障害について) 親御さん、家族の人たちははずかしいとかかわいそうとか、そんなことは一切もう捨ててね、どんどん世の中に出すべきだ。それが将来の幸せに結び付く大事なこと」

知的障害の子どもの母親「私たちが50歳、60歳と年齢を重ね、体力関係が逆になった場合どうしようかなというの、やはり眠れませんか、そこまで考えますと」

(番組での発言を本から抜粋)

障害者施設の「まごころ製品」販売 小倉駅 読売新聞 2017年02月12日



商品を販売する障害者施設の関係者ら

県内の障害者施設で作られた食品や雑貨類の販売会が11日、北九州市小倉北区のJR小倉駅で開かれ、多くの人でにぎわった。

障害者施設の製品を「まごころ製品」としてPRする県が、製品の認知度アップなどを目的に企画、約30団体が参加した。同様の販売会は、これまで県庁や福岡市内の百貨店などでも行っており、小倉駅では初めて開いた。

会場には、ベーグルやマフィン、から揚げなどの食品のほか、藍染めや木工製品などが売り出され、訪れた人たちが好みの商品を手にとっていた。また、今年度から志免町の障害者福祉施設に製造を委託している県立若松商業高校(北九州市若松区)の生徒が企画した「若商河童せんべい」も並び、人気を集めていた。

同校3年の中村秋穂さん(18)は「河童せんべいがたくさん売れば、障害者施設の売り上げアップにつながる。これからもPRしていきたい」と話した。

「アールブリュットは文化を結ぶ」 滋賀で国際フォーラム 京都新聞 2017年2月11日



「アールブリュットと美術館」をテーマに意見を交わすフランス、スイスの美術館館長ら(大津市におの浜4丁目・びわ湖大津プリンスホテル)

障害者など専門的な美術教育を受けていない人たちによる芸術「アール・ブリュット」の国際フォーラムが10、11の両日、大津市のびわ湖大津プリンスホテルで開かれた。世界各地から芸術関係者らが参加し、既存の芸術の枠にとらわれないアートの捉え方などをテーマに意見を交わした。

社会福祉法人「グロー」(近江八幡市)や滋賀県などをつくる実行委が主催し、今年で2回目。7カ国から参加があり、タイやオーストラリアでのアール・ブリュットの活動報告など多彩な事業が催された。

「アール・ブリュットと美術館」と題した討論会には、滋賀県顧問の長谷川祐子東京芸大教授らが登壇。日本の作品展を開いたスイスのラガーハウスミュージアム館長は「アール・ブリュットはグローバルな言語で、文化を結び合わせる」と強調、フランスのアル・サンピエール美術館長は「障害者の作品であると宣伝するより、審美的な基準で評価する

ことが重要だ」と指摘した。

人に見せることを前提としない作品を美術館に収蔵する是非も議論になり、長谷川顧問は「滋賀は戦後、(幅広い人が)制作をサポートしてきた長い歴史がある。作品の共有にはいろんなやり方があるっていいのではないかと語った。

12日も関連フォーラムがあり、午後2時まで滋賀県在住7人による作品展(無料)や、全国21人の作品展(500円)も開かれる。

<ニュース読者発>いじめや恋愛、率直に 知的障害者の久保さんが自叙伝

東京新聞 2017年2月12日



パソコンで自叙伝をつづった久保和則さん=多摩区で

本紙読者で、知的障害のある久保和則さん(59)=川崎市麻生区=が、自叙伝をまとめた。障害があることでいじめられたことや恋愛話など、自身をめぐるさまざまな出来事と、それに対する率直な思いがつづられている。(山本哲正)

久保さんの知的障害の程度は重度のA2だが、波がある。子どものころから思いをうまく伝えられず無口になったためか、言葉をはっきり発音するのが難しい。聴覚障害もあり、コミュニケーションは苦手という。東京都大田区出身。現在は社会福祉法人「らぼおるの樹」が運営するグループホーム(麻生区)で暮らしている。

自叙伝をまとめようと思ったのは、同法人の北川千鶴子理事長から勧められたことや、いじめられ、その時どんな思いをしたのか伝えたいと考えたからという。相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件への憤りも後押しした。「殺された人たちだって、生きたいという気持ちがあったはず」と久保さん。昨年十月からパソコンで打ち始め、四百字詰め原稿用紙にすると三十五枚に達し、完成した。

久保さんの話では、生まれたときは二四〇〇グラムの未熟児だった。父親は長崎の原爆投下で被爆。その後、九州から上京し、結婚して久保さんが生まれた。父親はその病院で、久保さんに知的障害があり、それは被爆の影響と告げられた。

小学四年の頃は全力疾走ができず、勉強も大変と感じるようになった。「どうせ勉強ができないから」と同級生から教科書をはさみで切られ「嫌だった」。いじめを見落とす先生もいたが、「久保さんは被爆二世かもしれない」と、被爆の影響の可能性を同級生に説明する先生もいて、感謝した。

成人してからも仕事を覚えられず職場でいじめられ仕事を転々。清掃会社で働いていた三十代、高熱を出して駅のホームで倒れた。病院の検査で知的障害があると初めて知った。そのときまで家族から知らされていなかったためパニックになり「どうやって暮らしていけばいいんだよ」と看護師に食ってかかった。その後、四十歳になって今のグループホームで暮らし始めた。

社会について考えたことも自叙伝に入れた。東京電力福島第一原発の事故に関しては「日本は地震国。また被ばく者二世が生まれるのか。やりきれない気持ちでいっぱいです」。また「われわれ知的障害者も恋をする」と、作業所の女性スタッフに思いを寄せた体験も盛り込んだ。

自叙伝をまとめるにあたっては、昔の写真を見て記憶を探り、周囲の話と照らし合わせた。新聞を毎朝二時間かけて読み、関心のある社会事情も組み込んだ。うつにより気分が波があっても書き続けた。北川さんは「久保さんは、人生の途中で知的障害を自覚し、精神的葛藤もあったと思う。周りの知的障害者をみる限り、社会に自分の考えを伝えたいという思いがこれほど強い人は珍しい」。

北川さんの話では、複数の障害者の自叙伝をまとめる形での出版も考えられるという。

久保さんは「いじめられたのは嫌でしたが、生まれてきて良かった。いじめで自殺を考える子どもたちに読んでもらいたい」と話している。

島根) リオパラ五輪水泳出場 一ノ瀬メイ選手が講演 井潟克弘

朝日新聞 2017年2月12日



今後の目標などを語る一ノ瀬メイさん＝松江市学園南1丁目

昨年のリオデジャネイロ・パラリンピックに出場した水泳の一ノ瀬メイ選手(19)＝近畿大＝が11日、松江市のくにびきメッセで講演し、泳ぎ続ける理由やこれからの夢を語った。

2010年、中学2年でアジアパラ大会に最年少の競泳女子代表として出場し、50メートル自由形で銀メダル。初めてのパラリンピックとなったリオ大会では、個人6種目を泳いだ。

京都市出身で、水泳は1歳で始めた。生まれつき右腕のひじの先がない。小学生の時、スイミングスクールに入ろうとして障害を理由に断られた。泳ぎの速さでは負けなかったが、「初めて障害者ということを知らされた」と振り返った。

知的障害者施設 委託職員が194万円着服

河北新報 2017年2月12日

青森県外ヶ浜町の社会福祉法人「平館福祉会」は11日、運営する知的障害者のグループホーム「外ヶ浜花NET」で、50代の女性委託職員が、40～70代の利用者6人から預かっていた現金計約194万円を着服していたと明らかにした。

法人によると、女性は施設が利用者から預かった現金を管理する立場を利用し、2012年夏ごろに着服を始めた。昨年8月、利用者の家族から「実際に使った金額と通帳の記録が合わない」と相談があり、発覚した。

女性は翌9月に全額を返し、委託契約を解除された。着服した金は生活費や借金返済に充てていた。施設は月1回、使用額と通帳の記録を確認していたが、気付かなかったという。

法人は県や外ヶ浜署などに通報したが、利用者らの意向に沿うとして刑事告訴しない方針。

介護施設の9割近くが24時間を2交代の勤務に NHKニュース 2017年2月12日

全国の介護施設の9割近くが、1日24時間を2交代制の勤務にしている、働く人が長時間労働を余儀なくされていることが労働組合の調査でわかりました。

この調査は、介護士や看護師が加入する日本医労連＝日本医療労働組合連合会が介護施設や、働く人を対象に4年前から毎年、行っていて、去年は全国の132施設が回答しました。

このうち1日24時間を2交代制の勤務にしている施設は117施設と全体の88%に上り、86%だった前の年の調査とほぼ同じ割合でした。

2交代制で夜勤をした場合、夕方から翌日の昼まで勤務の交代はなく、多くの場合、長時間労働になりますが、2交代制の施設で働いている人のおよそ4割が、月に「4回を超える」夜勤をしていると回答したということです。

また、全体の34%にあたる45の施設では働く人が仮眠をとるための部屋が「ない」として、厳しい労働環境にあることがうかがえます。

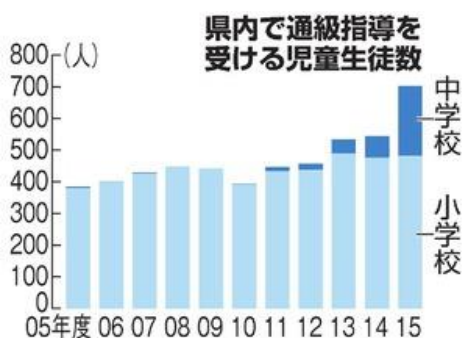
日本医労連は、「介護現場では、職員1人での夜勤が認められているうえ、夜勤回数にも上限の規制がない。国に改善を働きかけていきたい」と話しています。

青森) 発達障害などの子の通級指導、10年で1.8倍 榎本瑞希

朝日新聞 2017年2月12日

通級指導教室に通う男子生徒(手前)。じっとしているのが苦手なため、バランスボールに座って授業を受ける＝青森市

発達障害などのある子どもらが通常学級に在籍しながら、授業の一部を別室で学ぶ「通級指導」。2015年度に県内で通級指導を受けた子どもは703人となり、05年度の1.8倍に増えている。一方、市町村によって取り組みに差があるなど課題も浮上している。



「いまはむかし、たけとりのおきなというものありけり」。青森市立浦町中に昨年度できた通級指導教室。他中に在籍する1年の男子生徒(13)がモニターに映し出される古文の教科書を見ながら、読み上げソフトの音声に合わせて「竹取物語」を音読していた。つかえるたびに、傍らで土崎(とざき)純子教諭(43)が画面の背景色やスピードを調節し、何度も挑戦する。

男子生徒は小学生のころ、カタカナや漢字の読み書きが極端に苦手だった。一文を読み通すことができず、いらだって教室を歩き回り先生に怒られた。「文字がわけわかんなくて、とにかく疲れた」

障がい者差別、解消考え集い 16日、佐賀市で 佐賀新聞 2017年02月12日

昨年4月に施行された「障がい者差別解消法」について考えるイベントが16日午後1時半から、佐賀市文化会館で開かれる。一般事業者にも努力義務が定められている「合理的配慮」を広く周知しようと開く。参加無料。

障害がある人に対し、行政や事業者が適切な対応を行う「合理的配慮」の考え方を共有し、理解を深める。前厚生労働省の担当者をコーディネーターに招き、障害者や就労支援者、一般事業主らが登壇して支援のあり方や今後の展望をディスカッションする。また、社会福祉士などの専門家を各班ごとに交えてグループワークも行い、対策を話し合う。

法テラス佐賀と県弁護士会が共催。法テラス佐賀の松尾弘志所長は「学生や主婦、事業者などさまざまな人に参加してもらい、理解を進めるきっかけにしてほしい」と呼び掛ける。問い合わせは法テラス佐賀、電話050(3383)5510(平日午前9時～午後5時)。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行